

STAR OCEAN anamnesis -The Beacon of Hope-

[Novel] 和ヶ原聡司 [Illustr] 大熊まい



© 2016-2018 SQUARE ENIX CO., LTD. All Rights Reserved. Developed by tri-Ace Inc.

第四章・暗礁に潜む闇

「なんだって、ランビュランスの連中はこんな面倒な所を通ってるの？」

ブリッジのシートにハーネスをつけて座るリーシュは、スクリーンとレーダーの表示を交互に見る。

「単純に、追跡を攪乱するためでしょうね。ランビュランスの背景にどんな惑星があるか知らないけど、例えば敵対勢力がいて操艦技術に自信があるなら、ここを通れば安全を確保しつつ好き放題動けるもの。現にコロがやってるわけだし」

「ちよつと話しかけないで下さいミュリアさん今僕は極めてデリケートな操艦を行ってる最中でして艦のシールド効率が未だ完璧な状態にない以上直径12.5センチメートル四方以上のサイズのデブリとの相対速度100km/h以上の衝突は極力回避したい状況なんですそのためには艦のセンサーを最大限展開して周辺半径30kmの全てのアステロイドの慣性が働く方向を精査予測し間違っても艦に衝突することないように細心の注意を……」

スカイカーなどを運転し始めると唐突におしゃべりになるタイプの人間がいるが、コロの性格プログラムはそういう人間の人格をモデルに作られているのだろうか。

話しかけるなど言う割には、先ほどからコロはひたすらべらべらと同じようなことを繰り返して喋っている。

だが、それで本人の集中力が（AIにその概念が導入されているのかは知らないが）高まるのなら、今は余計な茶々は入れるべきではないだろう。

何せ今、我が艦は大小さまざまな小惑星が密集して漂流するアステロイドベルトの真つただ中を航行中なのだ。

「少し分かります。潜入先から撤退するとき、土地勘があるなら人の多い街中や進みにくい道を通って追っ手を撒くことありますから」

タイネーブがミュリアに同意するが、フィデルがそれに疑問を呈した。

「でもさつきから気になってるんだけど、さほど土地勘がありそうには思えないんだよな」

「え？」

「あれ見えるかい。今スクリーンに映ってる右端の大きな岩の影」

「そこだけやけに直線的だね。岩には見えないけど」

「多分航宙艦の残骸だと思います。小惑星に衝突したのかデブリが当たったのか、とにかく動けなくなったものが放棄されてるんです」

ネルが岩に見えないと言った何かは、フィデルが言うように航宙艦の残骸だった。

どれも著しく破損しているため所属は明らかではないが、少なくともこのアステロイドベルトに進入してからもう30隻以上の大小の航宙艦の残骸を三次元レーダーが捕捉している。ランビュランスのものであるにしろ無いにしろ、このアステロイドベルトは決して安定的

な航路ではないという証明でもあった。

「そう言えば、一部の小惑星に有機物の反応が見られました。コロクんのセンサーが鋭敏になっていたのでかなり詳細に形を捉えることができたんですが、ご覧になりますか？」

私が頷くと、ウィニーは手元にある端末を操作し、艦長席のコンソールに拡大された映像を転送してくる。

映っている物を見て、私は思わず顔を顰めた。

どう見ても、まともな生物にも友好的な生物にも見えない。

不定形なゲル状の塊の表面に、無数の牙のようなものが円形に浮きあがっていて、それが小惑星上で合体と分離を繰り返しているのだ。

こんなものももし航宙艦の外壁に張り付いたら、どんな化学反応が起こるか分かったものではない。

「仰る通り、どう見ても危険な生き物です。ランビュランスにとって、ここは通常航路ではなく、緊急用の秘密通路のようなものだと思います」

確かに、こんな異様な有機体が跳梁跋扈している上にサイズと当たり所次第では航宙艦を一撃で沈めかねないデブリに事欠かない宙域を常用しているとは考え辛い。

「そうでなければ、私達が追っている奴らだけがここを通らなければならない理由があったか。だね。前の星のことを考えると、私はそっちのような気がするよ」

ネルが言うのは、ファブリークの次に我々が補給のために立ち寄った星であった。

その星には、ファブリークのものより更に大型のパルスタワーが、なんと三基も建造されていたのだ。

だが、コロの分析では、大型ではあるがシステムや搭載されているエネルギーユニットが旧式であるらしい。

その上、メーアやエスペランスと同様、既に放棄されており、幸か不幸か土壌変性作業ももう行われていなかった。

むしろ重要なのは、これまでのタワーと違いタワーを建造した者、或いは管理していた者の直接的なデータが残っていたことだろう。

ファブリークのタワーは建造途中だったせいかデータがほとんど真っさらで、土壌変性の試行データらしきものがわずかにある程度だった。

だがこのタワーには、星の名と思しき『パーチェ』という単語と、管理者署名と思しき単語が付随したファイルに加え、どこかの星に向けた超長距離通信の痕跡が残っていたのだ。

特にコロが注目したのが、管理者の音声ファイルらしきものの存在だ。

かなり嚴重にロックされているとのことだったので、道中コロに解析を託しつつ我々はパーチェを後にした。

長距離通信とファブリークで出会ったランビュランスの逃走予測航路が重なったのが、今

我々が障害をかき分けかき分け進んでいる、この宇宙の暗礁地帯なのだ。

「ひえっ！」

その時、コロの悲鳴が上がって全員が思わず身を固くする。

「危ないところでしたたった今艦の進行方向わずか5 kmの位置を大きな岩塊が通過しまして本当に驚きました」

「あ、あんたがそういう声上げるとみんな怖いからやめて……」

リーシュが全員の心の声を代弁する。

「あれっ！」

だがまたも叫ぶコロに、全員がびくりと体を震わせる。

「もう！ だからやめてって……！」

「いえリーシュさん艦長実体はセンサーの探査範囲内に奇妙なものが見つかりましてそれが今の僕達の巡航目的に極めて高い一致率を見せましたので巡航用にメモリリソースを割くため最低値まで設定した感情表現シークエンスでもあれだけの驚きを表明してしまうことになって本当に申し訳ないと思うのですが……」

「つまり何があったって言うのよ！！」

「フアブリークとパーチェで収集したデータから間違いないと判断されます総合的な情報の統合率と整合性は97パーセントと判断されます機能が生きているランビュランスの艦を見つけたこのまま巡航すればあと4分31秒後に直接視認できる距離にまで接近できます接舷可能かどうかは状態によると思いますが艦長どうされますか」

平たく告げられるコロの言葉から、最も重要なものを抜き出すのに全員しばらく時間がかってしまった。

「[[[スゥー?]]]」

「あれがランビュランスの艦……何かの理由で航行不能になったのを捨てていったのかしら」

「ふい……仰る通りです……ですが恐らくは……はあ……艦の機能自体はまだかなりの部分が生きてると……へえ、思いますー、ふう」

航行を停止したことで、先程までとは打って変わって完全に気が抜けているコロの解説を聞きつつ、私達はスクリーンを凝視した。

「あれがランビュランスのマークなんでしょうか」

「或いは星や国の印章かもしれないわね。何と言うか、面白味のない艦ね」

ミュリアがそう言いたくなるのも分かる気がした。

数多の未開惑星の資源を盗掘する謎の組織ランビュランスの艦だというからどんな禍々しいデザインのものかと思いきや、小惑星に墜落している艦は、連邦ならどこにでもありそう

な、中型輸送艦だった。

武装も貧弱で、速度が出そうな作りでもない。

そんなどこまでも普通の艦が、この暗礁地帯に放置されている姿は逆に異様なものを感じさせた。

とはいえ、素通りという選択肢はこの場合有り得ない。

私はフィデルに、士官学校の実習での宇宙遊泳科目の単位が規定に達しているかどうかを確認してから、ランビュランスの廃船に乗り移る準備を整えるように言う。

「二人だけで大丈夫なのかい？」

大丈夫かどうかと言われればそこまで大丈夫でもないのだが、コロのセンサーからも、目的の船にもはや人影が無いことは判明している。

更によえば、今艦にいる者の中で、宇宙遊泳の経験があるのは私とフィデルとミュリアだけのはずだ。

そしてフィデルよりもミュリアの方が操艦技術の面で優れている以上、私とフィデルの二人でランビュランス艦に乗り移るしかないのである。

「先ほどお話しした有機生命体のこともあります。二人とも、お気をつけて」

準備を整えた私達にウイニーがそう声をかけてきた。

確かに、宇宙服を纏っているとはいえ、あんなものに接近するのは御免蒙りたい。

無重力状態では、流石のフィデルの剣捌きも意味をなさない。

私はフィデルに備品のフェイズガンを手渡し、エネルギーがチャージされていることを確認してから、船外活動シークエンスに移行した。

無音の宇宙空間で聞こえるのは、宇宙服内の自分の生体活動が発生させる僅かな音と、通信音声と、宇宙服内の圧力を調整する空気の流れのみである。

『艦長、あそこ、ハッチが開いています』

フィデルが指し示す先に、惑星地表に降りたときの出入り口であろうハッチがあった。

了承の意を示し、コロ達にハッチから内部に進入する方針を伝え、宇宙服のバーニアを調整して私とフィデルはランビュランス艦に取りついた。

宇宙服越しに触れた感触も、連邦艦に使われているカーボナイズドマルエーシング鋼と変わらぬものだ。

私は宇宙服のバイザーについたフラッシュライトを起動し、艦内に足を踏み入れる。

流石に重力管理機能は消失しているらしく、固定管理されていなかったものがそこかしこに浮遊していた。

あの不気味な有機生命体が入り込んでいる可能性を警戒し、船内ブロックを進むことに必ずクリアリングを行う。

だが結局私達は何の障害もなく、艦の操舵室へとたどり着いていた。

『一部のコンピューターは生きてますね。データが取れないかどうか、やってみます』

フィデルがエネルギーが生きているコンピュータに、スキヤナでアクセスを試みる。

ついこの前まで一未開惑星人だったとは思えぬ手際に私は舌を巻いた。

『コロ、一応アクセスできたみたいだけど、そっちでダウンロードできないか』

『ありがとうございますフィデルさん。やってみます』

やるべきことはフィデルがやってくれてしまっているので、私はフェイズガンに片手をかけて周囲の警戒を続ける。

やがて、バイザー内側にコロがデータダウンロードを始めたのを見て、私は少し溜め息を吐いた。

『どうしたんですか、艦長』

フィデルが私の溜め息に気が付いたのか、こちらを向いた。

いや、と私は咳払いをしてから、操舵室から見える我が艦の艦影を指差す。

旅の仲間が増え、それぞれの関係が良好なのは喜ばしいことだが、フィデル以外の全員が女性なので、たまに気疲れすることがある、と苦笑交じりに、だが正直に告げる。

『……こんなこと聞かれたら怒られそうですけど、ちよっと分かります』

本心はともあれ、フィデルは乗って来てくれた。

『僕の幼馴染も、女子だけになると突然突拍子もないことしたり、訳の分からないこと言い出すことがあるんで、よく喧嘩しました』

コロは言動や行動や音声の性質が何となく男性寄りに思えるが、それでもAIである以上性別の概念は流石にインプットされていないはずである。

『かと言ってリーシュに、男を呼んでくれ、って言うのもおかしいですしね』

冗談はともかく、今回の問題でも分かったことだが、今の我々には、艦の管理や先進技術に触れられる人間が圧倒的に足りていない。

リーシュとネルとタイネブはそれぞれに先進惑星技術への理解はあるが経験が圧倒的に足りていないし、ウイニーは畑が違うため、一般的な電子デバイスを運用できても戦闘艦の運行に関与できる技術は持ち合わせていない。

フィデルもこうした現場仕事はできるものの、士官学校生ということは航空艦の操艦は今まさに学んでいる最中のはずだ。

ミュリアもまた、ファブリークでの一件から必ずしも現代連邦技術の全ての事柄に精通しているわけではないようだ。

私はふと、リーシュに出会う前、謎の航空艦3隻に攻撃を受けたときのことを思い出す。

離艦したクルー達は、全員無事に宇宙基地に保護されただろうか。

謎の航空艦に拿捕されていないだろうか。撃墜されていないだろうか。

正規クルーの誰か一人でも残っていれば、少しは事態は変わっただろうか。

そこまで考えて、私は小さく首を横に振った。

そう考えるのは、艦のクルー達にも、今いる仲間達にも失礼なことだと気付いた。

もしクルーが残っていれば、艦の運行に支障は無かったかもしれないが、私自身は現場に出ることなく艦から指示を飛ばすだけで終わっていただろう。

いざこうして未知の宙域に放り出され、見知らぬ星々の戦士達と行動を共にすると、思っていた以上に自分が現場第一主義者であったことを思い知らされているのだ。

艦で待つのは性に合わない。

危険な場所に向かう仲間を、椅子にふんぞり返りながら待つのは、私のガラではないのだ。

そしてそんな私だからこそ、彼らも『艦長』として対等に接してくれているのだと思う。

艦長などというのは、仲間達の中での私の機能に過ぎず、序列を表すものではないのだ。

G F S S 3 2 1 4 F 本来のクルーが残っていれば、その序列も残ってしまい、今のようない人間関係は構築されなかっただろう。

一方で、G F S S 3 2 1 4 F の艦長である私には、所属するクルーの生命の安全を最優先に行動する義務と責任を負っていた。

だからこそクルー達から私は艦長として支持され、彼らよりも高い給料をもらっていたのだ。

あのときは、自分の命を顧みず彼らの安全を願って総員退艦命令を出すこそが最善の道だったのだ。

我が艦のクルー達は、私のその判断をきつと尊重してくれている。

『艦長、あらかたデータ、拾い終わりました。もう少し内部を探索してみますか？ ……何かありましたか？』

すると、フィデルが声をかけてきたので、私はふっと我に返った。

なんでもないと答えてから、私はフィデルの提案に賛成する。

無重力状態な上にハッチが解放されてしまっていたのでどれほどの物品が残っているかは分からないが、ランビュランスの正体に繋がることであればどんな細かいものであれ拾い上げてください。

『そうですね。それじゃ、持って帰れるだけのものは持って帰りましょう。何となく、沈没船の宝探しって感じがして、楽しいですね』

珍しくフィデルが子供っぽいことを言いましたが、これもこの宇宙の旅で初めての男子だけの行動によるものだろうか。

私としても全く同感だが、それはそれとして油断せずに行こうと告げ、私達は『宝探し』に向かう。

とはいえ、これだけ艦体がすっかり残った上で廃棄されたのならば、そう実のあるものが残されているとも思えない。

事実、ほとんどの区画はエネルギーが既に死んでおり、ハッチや隔壁が私達の今の装備では開けなかった。

ただ一ヶ所だけ、工具で無理矢理焼き切ったような扉があり、私達は扉の向こうの部屋を慎重に覗き込む。

『普通のキャビンですね。残念だけど、宝は無さそうかな』

さほど残念でもなさそうに言うフィデルだったが、私はふと、視界の隅に妙なものを見つけてそこに近づいた。

キャビンの壁に固定されたデスクの下に、何かが張り付けられている。

フィデルもそれに気付き、注意深く覗き込んだ。

『特に危険は無さそうですね。スキヤナには何の反応もありません。これ何だろう、布と、紙かな』

紙製のテープで無造作に張り付けられたその箱を注意深く引き剥がすと、私達はますます困惑を深くした。

思いがけず、随分と可愛らしい包装紙で包まれていたのだ。

それなりに長い時間放置されていたせいか所々破れてしまっているが、白地の上に印刷されているのは紛うことなく、あの『バーニイ』だ。

全銀河系に分布する謎の生物バーニイ。

ずんぐりむつくりの、むつちやらもつちやらの、つぶれアンマンみたいなウサギである。

人に懐く性質があり、騎乗も可能で、多くの星で人々の生活に密着しているのだが、いかんせんその生態は謎に包まれ過ぎていてよく分かっていない。

大人の個体も子供の個体も普通に街中を徘徊して都市の風景に溶け込んでいたり、野生種はある民族の秘伝によってしか捕獲できなかったり、特定の呼び声に応じて海洋以外の全ての地形を踏破したり、眠るときに石の如く凝固していたりする。

動物のくせに生クリームをたっぷり使ったパイが大好物で、個体によっては言語によって人類と意志疎通する。

バーニイから採取したよく分からないナモノカをどうにかこうにか加工して作ったブーツは、装着した者に神の如き俊足を授けるらしい。

これだけの事例からも、謎に包まれ過ぎていて何が何だか分からない生物だということは察せられる。

何よりこれだけ宇宙中にサンプルがあるにも関わらず詳しい生態が謎のままなのは、何故か全宇宙の生物学者たちが『それでいい、そのままでもいい』と思っているからだ。

一説によると、ある星のバーニイはその星の生態系の頂点に立っているため、騎乗中は一切の危険な生物と接触しないらしい。

そんな存在を、人間がどうこうできるはずがないと言うのだ。

ならば宇宙中で開催されているバーニイレースの会場で人間に大人しく飼育されているバーニイは一体何なんだという話になるが、バーニイレース関係者に真意を問おうとした、宇宙の歴史に名を残すある女性ジャーナリストが、

『あそこには踏み込んだじゃいけないわ。私でも、命がいくつあっても足りないもの』
とこぼしたほどだとか。

とにかく、私とフィデルがランビュランス艦の中で見つけたのは、貴重なデータ以外はこの、バーニイの包み紙に包まれた箱だけであった。

『あれですよ、これ、どう考えても……』
人に贈るためのプレゼントだろう。

無重力だから重量こそ感じないが、質量的には決して重いものではない。

開けてみたい衝動にかられるが、破れかけたバーニイの包み紙が、何となくそれをするのを憚らせた。

艦に戻ってスキャンすればそれで事足りるだろう。

厳密に言えば拾得物横領かもしれないが、相当の長期間に渡って放置されていたであろうランビュランス艦に、これだけを回収しに誰かが戻って来るとは考えづらかった。

フィデルに、艦に戻ろうと告げて、私達はランビュランス艦を後にする。

何だか、奥歯に何かが挟まったまま取れないような違和感が拭えない。

最初のミュリアの言葉ではないが、言ってしまうえばランビュランスには悪辣な盗掘組織以上の認識を持っていなかった。

ファブリークでのやり口を見ても、極めて狡猾で冷酷な者達が集まる悪の組織、という印象はぬぐえなかった。

だがこうして、星々の片隅に打ち捨てられた艦から見て取れたのは、どこにでもあるごく普通の先進惑星人類の影だった。

このバーニイ柄の箱を整えた人物は、誰のために、どんな目的で、どこでこれを手に入れ、包装したのだろうか。

贈る相手の喜ぶ顔を想像しながら、どこか宇宙の片隅の星の店で、財布の中のお金を払って買ったのだろうか。

ファブリークでネルの刃を目の前に余裕の態度を崩さなかった男と、ランビュランスという組織のこれまでの行動と、このバーニイの箱が、どうにも一つの線で繋がらない。

もちろん、ファブリークの反政府ゲリラ達がそうであったように、どんな組織に属しているようと、オフで一人の人間に戻る者はいる。

悪逆非道冷酷無比の独裁者が、家庭では愛情深い父親だった、と言う話は宇宙の歴史を紐解いてもそこから転がっている。

だからこのバーニイのプレゼントボックスも、そんな例の一つなのだと思うことはできる。

さすがにこれは、まずい状況だ。

私は推進力の低い宇宙服のバーニアに焦れながら、それでもなんとかファイデルと一緒に艦のエアロックに転がり込んだ。

そこで私達は自分を壁面に固定し、すぐに発進するように指示する。待っていたかのように艦が唸りをあげ発進するが、宇宙服に入ってくる通信からは絶え間なくコロの悲鳴が聞こえてくる。

『いやあああああこんな気持ち悪い状況でこの暗礁地帯を事故も起こさず航行とか無理ですよおおおお！！』

『落ち着きなさい！ 私も手伝うから！ 艦長！ 勝手に艦の武装使わせてもらうわよ！ このスピードで飛んでたら、大きな岩は避けられないわ！ みんなすっかり掴まってなさい！ あと、信じてる神様がいるなら祈っておくことね！』

『あ、あ、あ、 آپリスのごごごご加護がああありますようにっ！！』

最後にタイネーブの祈りとも叫びともつかぬ声が聞こえてくると同時に、艦は更に速度を上げた様だ。

エアロックに固定されたままの私とファイデルには、外の状況は知りようがない。

だが、聞こえてくる状況はあまり良いものではなさそうだ。

『嘘でしょ、この速度に着いて来るっていうの……！！ この、クソっ！！ コロ！ 姿勢制御しっかりしてっ！！』

『む、無理ですう！ ミュリアさんもうちょっと航路計算の負担分増やしてください！！』

『一人でこれ以上何しろって言うのよ！ って、ネル！？ 何してるの！？』

『ミュリア、あんたは船の航路の計算とやらに集中しな！ 岩への砲撃は私がやる！』

『できるの！？』

『こんぴゅうたあとやらが的を絞って命中精度を上げてくれる上に、冷却も勝手にやってくれるんだろ？ 全部手動のサンダーアローに比べれば、どうってことないさ！』

『よく分からないけど、議論してるヒマはないわね。任せたわ！ 砲撃用のオート補正コードはホロディスプレイに表示したけど、それでも打つキーは20以上よ、今更できないって言ってももう遅いから、しっかり頑張りなさい！』

『上等！』

進行方向の危険な小惑星を駆除する掃海砲撃を未開惑星出身のネルが行っていることに一抹の不安を覚えるが、聞こえてくるフェイズキャノンの駆動音を聞くと、なかなかどうしてうまくやっているようだ。

エアロックの壁にへばりついて通信を聞くだけしかできない私には、実は彼女の方が私よりよほど男らしく勇ましいのではないかという感想を抱く。

そのまま永遠とも思える振動と砲撃音に揺られながら、体にかかる慣性で唐突に航行速度

が上がったことに気づく。

『暗礁地帯を抜けたわ!!』

リーシュの歓声上がるが、

『まだです！ 艦にはまだ、あの有機生命体が沢山張り付いたままです！』
すぐにウイニーの警告が飛ぶ。

『シールドとやらでどうにかならないのかい!?!』

『シールドは艦体から一定距離離れた場所にしか発生しないんですよ！ 艦体にへばりつかれるなんて、航宙艦同士の戦闘じゃ完全に想定外の出来事なんですう!!』

『コロ！ コース55、マーク121、距離1800に大気がある惑星があるわ！ どうにかならない!?!』

『むむむ!? 3秒お待ちを! ……流石ですミュリアさん！ 大気はEタイプ！ この艦で突入するのに問題の無い大気組成です!』

『なら行くわよ！ 皆、今更だけどハーネスは締まってるわね!! ちよつと揺れるわよ!』
無茶なことを考えたものだが、他に方策がないことも私には分かっていた。

ゲル状の有機生命体なら、高熱には弱いはずだ。

コロとミュリアは、惑星大気圏への突入で発生する断熱圧縮で、艦体にへばりついた有機生命体を蒸発させようとしているのだ。

『うわわわっ』

隣にいるフィデルが、艦を襲う衝撃に小さな悲鳴を上げる。

艦と惑星の大気が衝突し、激しく圧縮されてできた空気の層と超高熱の対流が艦を揺らし
ているのだ。

特に今回は、暗礁地帯の生命体から逃げるための超高速突入な上にシールドの効率が低下しているため、その振動も尋常ではない。

『もう大気圏を抜けるわ！ まだ剥がせない!?!』

『せ、センサーはまだ蒸発しきってないゲル状物質を捉えています!』

『冗談やめてよ！ どういう組成してるの!?!』

『大気圏突破まで推定残り20秒！ 減速開始のタイミングを考えるとギリギリです！ 惑星地表面までの距離は……!』

『分かってるわ！ みんな対ショック！ 減速開始するわよ!!』

ミュリアの宣言とともに、進行方向に向けて激しいGが体を襲う。

『きゃあああああっ!』

軍事的な専門訓練を受けていないであろうウイニーの悲鳴が響き、私も思わず呻く。

『べ、ベタベタ取れました！ ミュリアさん！ ベタベタ取れましたよ!!』

『こっちはまだ減速制御中! ……くっ、なんてこと、これじゃ間に合わな……!』

『みんな、もう一度衝撃に備えな！ 全砲門、発射するよ！！』

そこにネルの警告が入り、同時に轟音が連続して艦体に響く。

8門あるフェイズキャノンを同時発射した反作用で、強引に減速しようとしているのだ。

『ち、地表面が……で、でも、これで何とか……！！』

度重なって体に響くGが、このとき遂に限界を超えた。

『か、艦長っ！？』

私の意識が、急激に闇に飲まれ始める。

人間として鍛えようのない頭蓋の内部が、度重なるGの圧に耐えられなかったのだ。

私はフィデルの呼ぶ声を聴きながら、急激に意識が遠のき、そして、

気が付くと、私は自室の天井を見上げていた。

Gに耐えきれず気絶したことは、記憶には無いが何となくは察していた。

生きているところを見ると、恐らく惑星への着陸自体は成功したので、私はエアロックから回収されてベッドに横たえられているのだろう。

視界に満ちる天井の照明に目を焼かれ、右手で顔を庇いながら左手を踏ん張って起き上がろうとすると、傍らから声をかけられた。

「大丈夫ですか？ 骨が折れていたんです。治療はしましたが、まだ少し寝ていたほうがいいですよ」

骨折と聞いて驚くが、戦闘用対ショックハーネスがある艦橋のシートではなく、慣性に振り回されないためだけのエアロックの簡易ハーネスに繋がれていてあの衝撃を受けて、骨折くらいで済んだのなら幸運だと思わなければならない。

航宙艦同士の戦闘でもし何の固定も無しに無重力のエアロックに放置されれば、数瞬後にはあつという間にフードプロセッサーにかけられたミンチ肉になってしまってもおかしくないのだから。

とはいえ骨を折ってしまうと、メディカルマシンを使っても数日はまともに動けないと思った方がいい。

大変なときなのに参った、と思いながら私は目を閉じたまま、どこを折ってしまったのかを尋ねる。

「肩と肋骨です」

随分と重傷じゃないか、と思ったところで、ふとおかしなこと気づく。

今私は、右手で顔を覆い、左手で体を起こそうとしている。

だが、どちらの肩にも痛みは無く、両腕ともいつも通りに動いたではないか。

私が思わず自分の体を見下ろしていると、傍らの声があった。

「実はウイニーさんとミュリアさんが、着陸の衝撃で大怪我しちゃって、お二人を先にメデイカルマシンに運び込んだんです。フィデルさんとタイネーブさんとネルさんも無傷とはいかなくて、リーシュさんが軽傷の皆さんの治療に当たっていますから、艦長の治療は私になるほど、そういうことだったのか。」

緊急治療に使えるメデイカルマシンはこの艦には二台しかない。

艦橋の二人を運び込んでエアロックに私を回収に来たら、私も大怪我をしていた、ということだったのだろう。

リーシュが治療の紋章術を使えるのはフアブリークで明らかになっていたから、軽傷だったフィデルとタイネーブとネルの治療は彼女に任せているということらしい。

「艦長も、骨は全てくっついてると思いますが、艦のことはコロがやってくれてるらしいので、しばらく寝てて下さいって」

被害は小さくはないが、なんとか全員無事だったということか。

私は安堵のため息を漏らした。

ウイニーとミュリアの怪我也心配だが、とりあえずあの異様な生命体群から逃げられただけでも御の字だと思わねばなるまい。

「あと、私はよく分からないんですけど、ここに来る前になんとかいう艦で回収したものは、全部フィデルさんが持ってますから後で確認してくださいって言ってました」

そうか、と答えて横になろうとして、私はあることに気付き飛び起きた。

「艦長!？」

ウイニーとミュリアがメデイカルマシンに入っていて、フィデルとタイネーブとネルをリーシュが治療している。

ならば私は一体、誰と会話しているのだ？

私はようやく光に慣れた目で、恐る恐るベッドの傍らを見る。

そこには、つい先ほどまでこの艦にはいなかったはずの人物が座っていて、こちらを心配そうな顔で見ている。

知らない人物がいつの間にか艦に現れているとしたら、それはきっとまたリーシュの紋章術の力によるものに違いない。

今でこそ良き仲間であるが、これまで現れた全員、私がそれまで見たことも会ったことも無い人物ばかりだった。

だが、今回は違う。

会ったことは無い。

だが、知っている。

私は、今私の傍らに座る少女のことを、知っている。

歳の頃は17、8。

大海を思わせる青い髪の間髪から伸びる、長い耳介。
赤い外套と、青いスカート。そして一際印象に残るのは、金色に光る三日月型の髪留め。
全てが、記憶と一致する。

銀河連邦所属軍人が必修科目として学ぶ連邦史に於いて、欠くべからざる人物。
「あつ、そうだすいません。私、呼ばれたばかりなのにまだ挨拶もしてなくて」

はっと気づいて無邪気に微笑むその面差しを、私は教科書で、創作物で、歴史資料で、何
度も何度も目にしてきた。

その人物が今、私の前で名乗る。

「私はレナ。レナ・ランフォードです」

レナ・ランフォード。

200年前、惑星エクスペルに端を発した全宇宙消滅の危機を未然に阻止した、『十賢者事
変』の『十二英雄』の一人であった。

※

「ランビュランスの資料では、ベーベンっていう名前だったわね」

艦橋でリーシュは、コロと二人でスクリーンに映る荒涼とした星の有様を眺めていた。

「はい。その通りです」

コロもリーシュに付き合っつて、駆動素体をスクリーンに向けている。

AIたるコロは本来目をどこに向けていても艦の内全てが視認できているはずだが、や
はり乗員のメンタル管理の任を負っているため、人に近い行動をするのだろう。

「惑星中心核に異常があるんですって？」

「はい。それがパルスタワーによる掘削の影響なのかは分かりません。ただこの星にもパル
スタワーは設置されており、これまでの星の中で最も大量かつ大規模な地下空洞が形勢され
ています」

「……そう」

「災い転じて、というものでしょうか。今回はその大空洞があったおかげで、ネルさんの砲
撃が地表を撃ち抜き、深度2000メートルもの余裕が生まれました。最終的に墜落せずに
済んだのは、ランビュランスのおかげとすることもできます。この場合は、ですが」

「そうなのね」

「はー」

「……みんなの様子は？」

「ミュリアさんも、ウイニーさんも、完治には最低でもあと36時間は安静にしていただき
たいです。フィデルさん達は軽傷でしたので、滅茶苦茶になった艦内の片づけや、ゲル状生

物がまだ張り付いていないかどうか警戒してもらっています。そして艦長は……」

「レナが治療してくれているから、もしかしたらミユリア達より回復が早いかもね」

コロの声色が固いのは、気のせいではあるまい。

「個体名、イヴリーシユさん」

コロが、リーシユを愛称ではなくフルネームで呼んだ。

「あなたは、一体何者ですか」

「……」

「フィデルさん達が現れたことも十分奇異ですが、こればかりは最早訳が分かりません。今回現れたのはレナ・ランフォードです。彼女は連邦のデータベースにその記録が数多残る、十賢者事変の十二英雄の一人。しかも」

そう、それは覆しようのない事実だった。

「レナ・ランフォードは、200年前の人物です」

レナ・ランフォード。

惑星エクスペルのクロス大陸、アリア村出身。

銀河連邦の公式な記録では、エクスペルが監視対象惑星として連邦に準加盟した際に先任留学生として地球にやってきた3人の内の一人である。

留学後は銀河連邦軍士官を志し、士官学校卒業後は軍医として深宇宙探査艦に乗り込み、連邦勢力圏の拡大に貢献した。

現代のエクスペルに、連邦随一のアカデミーシティとして名を馳せるリングという街がある。

その街の最高学府である名門リング大学の客員教授としても名を連ね、エクスペルの原住民目線での宇宙への理解の促進と科学技術の普及にも尽力した。

分かりやすい巨大な実績や功績こそ残る二人の留学生には譲るものの、後に惑星エクスペルの惑星代表理事となるクロス王家や、テトラジェネシスの盟主であるベクトラ宗家にもレナ・ランフォードとの繋がりを示す数々の資料が残されており、彼女の活動が惑星規模、宇宙規模に渡っていたことは想像に難くない。

今では彼女の故郷であるアリアはレナ・ランフォードを育てた地として顕彰され、その偉業を偲ぶ観光地にすらなっているのだ。

レナ・ランフォード個人の能力の最大の特徴は、長い耳介と治癒の紋章術である。

惑星エクスペルの紋章術体系には治癒系統が存在せず、彼女はエクスペルで唯一の治癒紋章術師であった。

何故レナ・ランフォードだけが治癒紋章術を行使できるのか。

その理由は、ウイニーの故郷であるというエナジーネーデで明かされ、その真実とともに、彼女は十二英雄への道を歩み始めることとなる。

「ウイニーさんのときは公式の記録が僕の中に無かったために話半分にしようと思いました
が、レナ・ランフォードのデータを参照しそこなうことはあり得ません。彼女は、過去から
呼び出された人物です」

「そう……なんだ、あたしは、彼女のことは知らなかったから、分からなかったわ」

「問題はそれだけではありません。メーアでは変装と諜報が得意なタイネーブさん。エスペ
ランスではバーベッドを調査するために生物学を学んだウイニーさん。ファブリークでは潜
入のエキスパートであるネルさん。そして今回、大勢出た負傷者を治癒するための、治癒の
エキスパートであるレナ・ランフォード。個体名、イヴリーシュさんの『召喚』は明らかに、
現況の困難に対応し得る能力を持つ人物を、特にピックアップして召喚できるものと判断し
ます」

「……」

「あなたの行使するシャイニーランサーと、ヒールの紋章術もそうです。いずれも座学と実
践の学習無しに習得できる術ではありません。ファブリークであなたは、最適なタイミン
グで最適な術を行使できました」

「……そう、だったね」

「個体名イヴリーシュさん。正直に答えてください。もしやあなたは……あわわわ!？」
そのとき、突然艦が激しく揺れた。

コロは驚くが、リーシュは大儀そうに立ち上がる。

「地震が、多いね」

「恐らく惑星中心核に何らかの異常があるのでしよう。パルスタワーの掘削限界がどこまで
か分かりませんが、この星に関して言えば、下部マントルにまで掘削が及んでいる可能性が
あります。中心核の対流に影響を及ぼしてしまっているのでしょうか……それより」

「ちよつと、外に出ようか。コロ。例のデバイス貸してくれる？ 話、外でしょう」

「えっ？ あ、はい……でも、艦からあまり離れないで下さいね。危険ですから」

コロの言葉に、リーシュは苦笑した。

「あんた、今あたしのこと凄く怪しんでるんじゃないの？ それなのに、身の安全を心配し
てくれるわけ？」

「えっ？ あっ……いえ、これは僕のAIとしての優先順位の問題で……!」

「いいよ、コロが気持ち悪いけど優しいのは知ってるから」

「む、むむむ、そ、そんなことでほだされたりはしませんよっ！ 僕はAIですから！ 何
事もデジタルに杓子定規に0か1かでビシッバシッと判断するんですっ！ あとキモかわい
いんですっ!!」

「はいはい。ちよつと一緒に出てきてもらえる？ そんなに遠くには行かないから」

リーシュは襟にコロのデバイスをつけて、ハッチから外へと出る。

赤い空と赤い大地がどこまでも広がり、大気に地殻の異常が影響していると一目で分かる。だが艦とリーシュの足元は、ネルの砲撃で崩れたものか、底も見えない恐るべき空洞が形成されており、その空洞の壁の中腹当たりに、パルスタワーが、野晒しの軀の如く傾き放棄されていた。

「また少し揺れてるね」

『ベーベンに着陸してから15時間ほどで、微震を含めれば既に1000回以上もの地震を検知しています。正直、皆さんの容体が落ち着いているのであれば、衛星軌道上で待機した方が安全だと思います』

「あの変なベタベタがまだ宙域にいるかもしれないわよ」

『それはそうですけど……って、今はその話じゃありません！ リーシュさん、あなたの話です！ ズバリ聞きます！ リーシュさん、あなたは我々に隠していることがありますね？』
駆動素体が無いので迫力には欠けるが、それでもリーシュの襟のデバイスの声から、コロがあつてバランスの悪い腕を出して指を突き付けている姿がありありと浮かぶ。

『あなたは、記憶を失ってはいないではありませんか？』

「……」

リーシュは、すぐには答えない。

『あなたのこれまでの行動は、我々に敵対するものではありません。ですが、これからは分からない。実際に、あなたの望みに従ってランビュランスを追う我々は、今回大きな被害を被っています』

「そう……だね」

『艦の安全と連邦法を守るAIとして、この現状を維持することは了承できません。個人名イヴリーシュさん、一連の事態に対する説明を要求します』

コロの宣言は、連邦AIとして極めて妥当なものであった。

「ごめん」

その解答もまた、人として極めて妥当なものであった。

「あたしは、記憶を失ってなんかいない。嘘について、本当にごめんなさい」
嘘をついたことに対する、真摯な謝罪。

「でも、あたしには、みんなと敵対する意志はない。ランビュランスの行動に怒っていて、止めたいのは本当。あたしの力が、艦長達が地球に帰るために必要ならどんな協力だってする。それは……信じて欲しい」

『……納得したいところではありますが、リーシュさんの召喚の紋章術は謎が多すぎます。召喚対象が、明らかに時間の壁を超越しているんですから』

やはり、コロもその結論に至ったようだ。

リーシュの紋章術は時間の壁を越えている。これはもはや、覆せない事実だ。

『レナ・ランフォードだけじゃありません。ウィニーさんがエナジーネーデ出身だと仰っていたのは、やはり彼女が200年前の人物だからでしょうし、ミュリアさんがフアブリークでフェイズガンに驚いていたのも、ミュリアさんはフェイズガンが一般化するより前の時代の人間かもしれないという推測が成り立ちます』

これまで考えたことは無かったが、レナが現れたことによって、フィデル以外の全員がもしかしたらこの現代の宇宙の存在ではない、という可能性まで出てくることになる。

時の彼方に影響を及ぼし、あまつさえ時の彼方から人を召喚する紋章術。

それを、一個人の力で行使するなどという話は、聞いたことが無かった。

「召喚の紋章術は……ごめんなさい、自分でもどうしてこんなことができるのかは、分からない。理由はあるはずなんですけど、子供が自分がいつ立てるようになったか覚えていないみたいな感じで……紋章術を使うにはあの石が必要で、でもどうしてあれが必要なのかは分からなくて、私の術とあの石の反応が不思議な力を発しているとか思えないの」

『……曖昧ですね。あの岩の惑星にいたことや、バーベッドを特別に恐れる理由についてはどうです？』

「自分でも曖昧だと思うわ。でも、あんた達と会ったあの惑星にいた理由も、バーベッドが怖いのも、理由は分からない。そういう意味では記憶は失っているのかもしれない」

『嘘とも本当とも判断しかねます。これは艦長の判断も仰がねば……』

コロのその言葉にリーシュは悄然と俯いてしまうが、ふと、背後に近づいた足音を聞いて、こちらを振り返った。

……私は、最初からコロとリーシュの話の全てを聞いていた。

レナ・ランフォードが現れたという事実混乱しつつ、事情をリーシュから聞き出そうとしたら、艦橋でコロとリーシュが深刻な話し合いをしていたのだ。

割って入れれば話の腰を折ると思いきコロに任せていたが、そろそろ姿を現しても良いだろう。

「艦長……もう、大丈夫なの？」

気づかわしげなリーシュに、レナの力のおかげで、と答える。

レナはもう少し休めと言うが、体調は万全であった。

「そう、よかった。今の話、聞いてた？」

嘘を言っても仕方がないので、最初から聞いていたことを告げる。

「そっか……艦長、あのね」

言い募ろうとするリーシュを私は留める。

私は最初から、リーシュが記憶を失っていないことなど、分かっていたから。

「えっ……？」

意外そうにしているが、こちらもある程度の人生経験を積んだ軍人である。

記憶を失っているはずのリーシュは、先進惑星の航宙艦の中での生活に全く戸惑いを見せ

なかった。

地球に帰るために相談する私とコロの会話を、全て理解していた。

異なる場所から呼び出されたフィデル達と話す中で、明らかに『知っていること』と『知らないこと』の区別をつけた会話をしていた。

およそ、記憶を失っている人間の行動や言動ではない。

記憶喪失者には大別して二通りあり、特定の記憶だけが喪失しても日常生活を送る上での常識的な行動は問題なくできる者と、認知症患者のように日常の全てにおいて万遍なく記憶喪失による障害が発生する者である。

そしていずれの場合にも共通するのは、本人或いは周囲が、本人の行動に不安を抱いて過ごさねばならないという空気だ。

だが我が艦に迎え入れてからこれまで、リーシュの行動に不安を抱いたことは一度も……。

「フアブリークでシャイニーランサーを暴発させたときは？」

……そのとき以外は、不安を覚えたことは無い。

思わず言い直した私にリーシュも、つい笑ってしまう。

「……本当に、ごめんなさい。あたしは嘘をついてた。艦長達をだましてた」

それは素直に受け止め、頷く。

「自分の力が、どうして使えるのかは、本当に分かってないの。これは、本当で……」

そして更に言い募ろうとするリーシュを、私は止めた。

リーシュに悪心があるなどという疑いを、今更挟むようなことはしない。

話せるようになったら話してくればそれでいいし、コロの疑問は当然ではあるが、逆に言えば、リーシュがいると何かと便利なのだ。

「えっ？ あたしって、まさかただの便利な仲間召喚マシン扱い？」

そういう側面も否定しない。

「ちよっ」

だが、リーシュの意志が今の我々を動かす大きな原動力になっており、その方針は私の連邦軍人としての矜持と使命に、何ら矛盾するものではない。

だから、リーシュは今のまま、艦のムードメーカーとして、便利な召喚マシンとして、艦橋でコロと丁々発止の言い合いをしていてほしい。

「もう！ 何言い出すのよっ！ 艦長酷い！」

『人を漫才コンビみたいない方しないで下さいよ艦長！』

リーシュが、泣いているようにも、笑っているようにも見える顔で私の胸を叩いた。

「本当に、いいの？」

『本当に本当にいいんですね！？』

リーシュがか細い声で尋ね、コロが喚く。

「本当に本当に本当に、許してくれるの？」

『本当に本当に本当に本当に、いいんですね！？』

続けるようにリーシュが言い、コロが余計に念を押して来るので、

「あたっ」

『ああんっ！』

しっこい。

私はリーシュの額と襟のデバイスにデコピンを叩きこんだ。

『もう！ 艦長がこんなこと言うなら、僕一人が空回りしてバカみたいじゃないですか！！』
そんなことは無い。

私の次に艦の運行決定権を持つコロとの意見交換は、私にとって重要な状況判断の材料だ。

コロが慎重に物事を分析してくれるからこそ、私はいざというとき大胆になれるのだ。

『ふ、ふん、我らが艦長は一度受け入れた仲間は絶対に見捨てない懐のふかい人だって僕は昔から知ってましたー！ リーシュさんの敵は僕達の敵、今後も一緒にがんばっていきましようねー！！』

やけくそ気味のコロと、うっすら涙を浮かべているリーシュを少し押し戻し、私は艦に戻ろうと促す。

今も、私達の足元を揺らす地震のせいで、空洞の際が崩れるかもしれない。

するとリーシュが、

「ちよっと、待ってもらっていい？ 一つ、できるかもしれないことがあるの」

リーシュは私から離れると、その危ない空洞の際に立つ。

「この星にも、まだ生命がある。パルスタワーの力で星の力が失われかけているけど……それでも、何とかしてあげたい」

リーシュの紋章力が高まるのを感じ、私は一歩下がる。

彼女の行動原理は、これまでたった一つ。

降り立った惑星の幸せな未来を願うことだけ。

「混沌に沈みし星の鼓動、我が命のもと、正しき理を取り戻さん！」

リーシュの宣告が星に迸る。

大気が震え、大地が鎮まる。

現象として目の前で起こったことといえば、かすかな風がベーベンの表面を吹いただけだ。

だが私は、コロの報告を待つことなく、何が起こったか気づいていた。

パルスタワーが蝕んだこの星の惑星中心核から来る振動が、もはや起こっていないことに。

「命が自然に育つ星に、生まれ変われますように……」

リーシュの祈りが届くかどうか、人の身にある私達に知る術は無い。

だがそう願わずにはおれない気持ちは、リーシュと私達とで、何ら変わることはなかった。

※

『CS計画を止めなければ……。パルスタワーは惑星に死をもたらす悪魔の装置じゃ……。今も3つのタワーがこの星を飲み込もうとしておる……。誰か頼む、あれを止めておくれ』
悲痛な思いが、艦橋に響き渡る。

「これが、惑星パーチェのパルスタワーで入手した音声データをクリアにしたものです」

コロの解説に、全員が顔を顰める。

音声データの主は老齢の男性のようだが、悲痛でありながらどこか諦めてしまったような心が立ち往生してしまっているかのような印象を抱かせた。

「そしてこちらが、暗礁地帯で座礁していたランビュランスのものともしき輸送艦からダウンロードしたデータです。単なる航行データから輸送していた品目といった雑多なデータの中に、頻繁に『CS計画』という語句が出てくる報告書の類が見受けられます。そして……へへへ、皆さん驚かないでくださいね！」

「何よ、もったいぶって」

「なんと！ この輸送艦のデータによって、僕達はランビュランスの言語体系データを完全に取得しました！！」

コロは駆動素体なのに鼻の穴を膨らませそうな勢いで凄むが、仲間達の反応は冷ややかだった。

「それで、そのCS計画っていうのは、一体どういうものなんですか？」

しかも話を促したのが全く悪気のない質問を飛ばしたタイネーブだったのだから、コロも、もつと褒めて下さいよおなどと言うのも憚られたらしく、不満そうにしながらも話を進める。
「……えつとですね、この言語形態や、艦に残っていたキーコードなどから、パーチェで手に入れたデータのロックやメーアで手に入れたファイルのエンコードなども可能になります……つまり、大体分かりました。バーベッドのデータとかも入ってまして、ランビュランスがどういう組織で、CS計画が何なのかも、はい」

「本当か！ 凄いいじゃないか！」

「へえ、それならもつと具体的な作戦行動が取れるわね。コロ、やったじゃない」

「敵の計画の全容が掴めていれば、やれることも増えますね！」

「バーベッドのデータ、ありがたいです！ 助かります！」

「やったね、コロ」

「やっぱり銀河連邦の機械の力って凄いのね……！」

今度は全員が口々に賞賛の声を上げるが、コロが褒めてもらいたかったポイントとズレていたらしく、アクの強い顔を複雑に光らせて、話を続けるのだった。

「細かい技術的な部分を除いてCS計画の概略をお話すると、正式名称は『惑星コールドスリープ計画』と言い、特定の惑星を人為的かつ瞬間的に全球凍結させる計画のようです」

「惑星を全球凍結!?!」

驚いたのはミュリアである。

「そんなことが人為的に可能なの!? 極限の氷河期であつても起こる星と起こらない星があるくらい希少な自然現象よ? しかも、瞬間的に……」

「ランビュランスでは既に実例があるようです。パルスタワーで精製されるレアメタル類は、CS計画のエネルギー源として利用するようです。変性とはいっても好き放題変えられるわけではないようで、効率が良い土壌とそうでない土壌があるようです」

「つまりファブリークやパーチェやベーンは、効率がいい星ってことだったのね」

リーシュの言葉に、コロは全身で頷く。

「まさに、あの音声ファイルの男性が言う通り、惑星を滅ぼす悪魔の装置ですね。他にも、ランビュランスが組織や国ではなく、惑星の名であるということも判明しました。意図はどうあれ、このCS計画は惑星政府主導で行われているものと判断します」

「侵略国家ってわけかい」

ネルが厳しい声色で問うが、コロは少しだけ否定した。

「そこが不思議なのですが、輸送艦に残っていたデータによると、CS計画はその事業規模に比して実働部隊の数はあまり多くないんです。パルスタワーの建設に裂かれている人員や機材への投資も最低限にしか行われていないようです。侵略によって版図を広げる意図があるならもつと人員を投資してもいいのではないかなと」

「そう言えば、ファブリークでは反政府ゲリラを人材として活用していましたね。末端のゲリラもかなりの情報を持っているのは、そういうことだったんですね」

タイネーブが見えないところでやっていたあれやこれやのことが思い出されて、私とフィデルは思わず身震いした。

「それに、目的が瞬間全球凍結では意味が分かりません。何にもできなくなっちゃって、一体何のために侵略してるんだって話ですから」

「バーベッドは、そのCS計画にどう関わっているんですか」

「それが奇妙なんですウイニーさん。輸送船にあったデータファイルでは、かなりの頻度で報告書の中にバーベッドの襲撃を警戒したり、襲われた際の対処に苦慮しているという旨の文書が混じっているんです」

「えっ?」

「バーベッドに受けた被害を金額換算して報告するものもありました。これを見ると、ランビュランスはもしかしたらバーベッドを制御しきれていないのか、もしくはバーベッドはランビュランスやパルスタワーとは全く無関係という可能性があります」

「無関係って……だって、パルスタワーがある星では、形態如何に関わらず必ずバーベッドがいましたよね？」

「そうなんです。その星の生物に光る杭が刺さったバーベッドが必ずいました。ですからランビュランスが侵略的意図を持って標的にした惑星に放っているものだとばかり思ったのですが、どうもそういうことではなさそうなのです」

「どうということなのかしら……」

「何せ一輸送船のデータですから、そこまで機密に踏み込んだものではなかったのでこれ以上の詳細は不明です。ですがランビュランス勢力圏の宙域についてかなり詳細な宙図を入手できたのは極めて大きな収穫です。更にはパルスタワーが設置された近傍の星へのルートや暗号通信の方式など、有用なものが盛りだくさんです。それですね」

コロガ、メインスクリーンに惑星の画像を表示する。

「次はこの惑星を目指すべきかと思えます」

「次の星の目星がついているの！？」

リーシュの驚きも無理はない。

これまでは基本的に着陸できる惑星があるかどうかは運を天に任せるほかなく、手探りで宇宙を旅してきただけに、出発前から目標地点が確定している航行は初めてのことだった。

「ワープを使えば数日でたどり着ける距離です。星の名はヴィレ。開発計画の日付はかなり新しくランビュランス本星の近傍では比較的多くの人員が投下されている星です。こうしてみると、あのランビュランス艦は見た目の割に放棄されてからそこまで時間が経っていないことが分かります」

「本星に近いのに、開発は最近なの？」

「どうやら、ヴィレは岩石惑星としてはかなり低質量の星のようです」

「……えーっと、それってつまり？」

タイネーブとネルとレナがその解説を理解できずに首をかしげている。

「端的に言って小さくて軽い星だということですよ。岩盤が厚い地層だらけのようで、パルスタワーの土壌変性効率は良くないでしょう。資料や日報などの文書を総合すると、開発優先度が低かった星によく順番が回ってきた、という感じですね」

とはいえ、ランビュランス本星に近いのなら、他にも開発されている星があるのではないだろうか。

人員が多く投下されているなら警戒も強いことが推測されるのに、そのヴィレを選ぶ理由は何なのだろうか。

「はいそれが、少し奇妙なのですが、ランビュランスはいくつもの浮遊型の宇宙基地を所有しているのですが、そのうちのいくつかは、既に『凍結処理』が為されているようなんです」

「凍結処理って、そのCS計画の一環なの？」

「そう考えるのが自然ですが、ランビュランス本星からヴィレに向かう航路の丁度中間にある基地の中にですね、意図的に回避されている基地があるんです」

コロがスクリーンに映した基地は、かなり巨大な規模のものに見える。

「書類上は廃棄された基地ということになっていますが、解体処分や凍結計画の対象にはなっていない。他の宇宙基地は全て、使われなくなる頃にはきちんと解体計画が実行されたり、凍結処理が為されたりしています。廃棄が決まった時期と凍結処理が多くなった時期が一致しているのです、この宇宙基地だけ残っているのが極めて不自然なんです」

最早、事態は盗掘組織を追跡するという単純な話ではなくなってきた。

輸送船の中で発見した、バーニイ柄の包み紙のプレゼントボックスという、盗掘組織という前提にまるで似合わぬ発見が、ランビュランスの名の下にいる人類社会の広大さすら感じさせた。

そう言えば、あの箱の中身をまだ検めていなかった。

「つまり、そこに何か隠されている可能性がある、ってこと？」

私が考え込んでいる間に、リーシュが質問を重ねコロが答える。

「その通りです。とはいえ宇宙基地ですので直接乗り込む前にヴィレで様子を探るのがいいだろうということと、あとは僕らの艦のためにも、人が寄り付かない宇宙基地なら寄ってききたいんです」

「ああ、そういう」

ミュリアも、そして私も得心する。

「ベーベンへの着陸は、ほとんど墜落だったものね。シールドやセンサーが壊れなかったのは奇跡だけど、あのゲル生物に取りつかれたところの検査は、しておきたいわよね」

「そういうことです。可能ならばヴィレでファブリークでできなかった建設中のパルスタワ―の様子を観察しつつ、この廃棄宇宙基地で応急修理ができるのが理想ですね」

確かにランビュランスに近づけば、航宙艦同士の戦闘が発生する可能性も十分考えられる。情勢を探るためにも、艦のパフォーマンスを保つためにも、ランビュランス近傍のヴィレと宇宙基地に向かうことは妥当な結論だと私は判断した。

わずかずつだが確実に、この宇宙を蝕んでいるものの正体に、私達は近づきつつある。

今この艦にいる誰の力が欠けても、成し遂げられることではなかった。

これからより状況は深刻なものになっていくだろう。

それを乗り切るために、これからも皆に、力を貸してもらいたい。

「任せて下さい！」

最も新しい仲間であり、連邦軍人にとってはある意味伝説的な存在であるレナ・ランフォードが大きな声で答えてくれた。